

宮城道雄の自筆点字楽譜『秋の調』の記譜法

村山 佳寿子 (お茶の水女子大学大学院)

本発表は、盲人箏曲家・作曲家である宮城道雄(1894-1956)(以下、宮城とする)の自筆点字楽譜(点字による自筆譜)における初期の記譜法について、その実態を明らかにするものである。

宮城の自筆点字楽譜は、一般財団法人宮城道雄記念館資料室に所蔵されている。研究対象とする『秋の調』は、整理済みである248点/260曲の自筆点字楽譜の中でも、最も記譜の年代が古いものの一つで、大正時代後期から昭和時代初期に記譜されたものである。宮城が本格的に点字楽譜の勉強を始めたと言われているこの時期は、日本における箏曲のための点字記譜法が確立されていない時期でもある。また、『秋の調』は、他の多くの自筆点字楽譜が宮城自身の備忘用として記されたものであるのに対し、①詳細な指遣いの指示、②記譜に用いた記号の説明、③演奏上の注意点の記載、等が為されており、楽譜の体裁も整えられていることから、宮城によって教則的な意図をもって作成された資料であることがうかがえる。これらは墨字楽譜(印刷や手書きによる、目で見ることが可能な楽譜)には記載されていない内容も盛り込まれている。

宮城は楽譜を用いて教習を行った先駆者としても知られているが、宮城には、盲人と晴眼者の二通りの弟子がおり、宮城作品の教習にあたって、弟子達は、それぞれ点字楽譜と墨字楽譜を用いていた。墨字楽譜は、楽譜出版社である「大日本家庭音楽会」から発行されたもので、そこには宮城自身も楽譜作成に携わっていた。しかし、その方法は、宮城の自筆点字楽譜の内容を反映させたものではなく、宮城の演奏を聴き取って作譜するというものであった。

本発表では、自筆点字楽譜『秋の調』を事例として、この時期に宮城が用いた記譜法について、墨字楽譜との比較を通して考察を行う。